

## 別表Q4. マスター及び博士課程に行く学生数が減っている理由

1) 学者を志す学生数が減っている。2) 学位取得後のアカポス数が減っているとの情報に将来の不安を感じている
40歳前後のポスドクの状態や大学の研究力の低下を間近に見ているためと思われます。
研究職に就ける可能性が低い、あきらめてしまう。キャリア教育が学生を就職に急かしてしまうことがある。大学院に興味があっても周りに流されたり、経験を積むため就活すると、好景気なため、内定を取りやすくそのまま就職してしまう。
博士課程に行くことで、研究者の道を目指しても職が約束されるわけではなく、将来が厳しい。よって、教員としても学生にかなりのポテンシャルを見出さない限り、博士課程進学を強く勧めることを躊躇う。
一番の理由は学位取得後の就職や将来構想の目処が立たない不安によると思われる。ポスドクの不安定職においても就職難があるため、正規ポストにおいては尚更の不安があるためと思われる。
将来像が見えない。経済的な理由、など。
大学院修了後の就職が見えず不安がある。マスターは問題ないが、博士課程は極めて深刻である。大学の助教のポスト数は、どんどん減る傾向で、博士課程で研究してもそれらのポジションへの就職が困難なためだと思う。大型プロジェクト研究の任期付きポストは増えているが、次から次へ渡る必要があり、腰を据えた研究が出来ないことも要因の一つである。
博士号取得に時間がかかりすぎることやその後就職が難しいことから進学に魅力を感じていない。
設問13.にまとめて回答致しました。
学生に将来の危機感が強く、研究者は食べていけない、身分が安定しない、何処に行くか分からないといったネガティブな印象が強い。
博士課程への進学が減っている理由として、アカデミアに残り続けることの困難さ（ポジションの獲得および研究生活そのものの困難さ）を感じているとともに、企業に入ることの安定性、生活の容易さ、可能性の高さ、将来性の広がりを見出しているように感じる。
学生は修了後の進路の不安定さに対する懸念を持っています。教員の側は、学生の博士課程における研究をサポートするだけの研究費を確保できるかどうか不安があるため、以前のように意欲のある学生の進学を推奨しない傾向があると思います。教員が進学を推奨した場合、在籍時の研究はできるだけ不自由なく実施できる環境を準備したいと考えているわけですが、科研費等の研究費が途切れた場合、最悪のケースでは自ら大学に研究費を寄附することになってしまいます。
学費の負担と将来の就職への不安
就職に関する不安が大きい。ネットにおいて、博士課程が就職においてネガティブであることを記している記事が多く、就職がよい現在では、方向性の選択肢として選びづらい。
・将来への不安から早めに就職することを望む
現在のところ、修士課程までは進みたいと考えている学生数は目立って減っていない。しかし、博士課程は明らかに減っている。その理由は、経済的なことと、就職に希望が持てないということだと思う。助教になれる確率が極端に低いのは間違いないと思います。
大学院説明会の参加者は横ばいであるが、大学院受験者の数が減っている。他大学の大学院を受験する人が増えたためと考えられる。また、最近では就職状況が改善していることも関係している。
就職の不安
博士採用する企業が少なく、多数に流れる主体性のなさ、親の理解がないこと、などです。
マスターについては、学部卒で就職率がよい、マスターをとるメリットがない
博士課程については、終了後の展望が見えない（アカデミア・企業ともに就職が困難）
昨今の博士課程進学後の先輩たちの状況を見れば、博士課程に行くのを躊躇うのも仕方ないかと思えます。博士号所得後の人生設計が見えない状況だと思います。とても優秀な学生であったとしても、将来の展望もなく博士課程への進学を積極的に勧めることは、教員として無責任に感じるため、進学を勧めることはほぼできません。また博士まで行かせるお金の余裕がない家庭が多いという印象です。先のことはわからないのに、東京オリンピックが終わったら不景気になるから早めに大学卒で就職する、という学生もいます。
1) 就職先が豊富（かつ若者の人口、特に地方に留まりたい若者も少ない）2) アカデミック研究者の魅力低下（給料少ない、教員は皆疲れている）
就職への懸念、アカデミックポジションへの不安
マスター修了での就職先が良い。博士修了後の不安（ポスドクは比較的多いが、助教などの職がない）。

<p>様々な要因が考えられますが、最も大きな要因は、「社会から受ける漠然とした不安」があります。日々、ネットからの情報を受け、学生達は将来に対して不安を抱くようになり結果として少しでも早くに安定な職業を目指す傾向があります。#しかし、そのような学生でも一人一人丁寧に、身につけるべき学力、能力の必要性を説明すると分かってくれます。やはり重要なのは、研究の重要性を分かっている教員が、一人一人の学生に向き合うことです。ただし、現在の大学教員は様々な用務に忙殺され、時間の捻出に苦勞しているのが現状です。</p>
<p>博士後期課程に行くことの経済的負担が大きいことと、博士を取得しても大学の研究者になるのが難しいため。</p>
<p>就職希望の学生が増えているから。基礎研究志向の学生が少なくなった（他大学に進学するようになった）から。</p>
<p>ネガティブなイメージが報道などで広まっている。</p>
<p>優秀な学生が進学をリスクと考える場合が多いため。</p>
<p><b>【修士課程進学者の減少理由】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学部卒の民間企業への就職が数年前までより良くなっている。</li> <li>・有名国立大学の大学院に比較的合格しやすくなっているため、他大学大学院への進学者が増えている。</li> </ul>
<p>オリンピック景気で就職活動が上手くいくため。大学院の授業料が高いため。</p>
<p>学位取得後のアカデミアの常勤ポストが非常に少ないため</p>
<p>修士課程に関しては、色々学生にも聞いたことがありますが、学費が一因と考えられます。経済的な問題がなければ、本学の修士課程に行きたかったという声は耳にします。そのためか、私立にくらべて学費の安い国公立の大学院に進学する学生は、徐々に増えてきました。また、ここ数年は就職活動が売り手市場であり、学生自身が進学を希望していても、ご両親が「経済が好況のうちに」と、就職を勧められる、ということもあるようです。</p>
<p>学振特別研究員に採択されない限り経済的負担が大きいこと。アカデミアに残るための競争率が不当に高いこと。博士からでも十分に企業にいけるということが、学生たちには周知されていないこと。</p>
<p>職がないから</p>
<p>学科（コース）レベルでは、1～5名の間で増減を繰り返しており、どちらとも言えないが、内部進学者は景気に左右されている印象もある。</p>
<p>全般的に地方大学では学部で卒業し、企業に就職する学生が多いが、大学院への進学者に関しては、2.でも述べたように、修士で旧帝大系の大学に進学する学生が多いことが博士課程への進学者を減らしている理由の一つだと考える。私達は連合大学院として博士課程を持っているが、海外(主にアジア)からの留学生が進学する比率が高く、日本人の学生は連合大学院は旧帝大系の大学に比べ、著しく劣っていると考えている節が伺える。遠因としては地方大学の教育・研究状況の悪化や教員の多忙化、予算の低下等があることは間違いない。</p>
<p>就職状況がよくなったこと。他大学院に進学する学生が多いこと。</p>
<p>博士課程へ行く学生数は激減しています。博士へ行くことが、アカデミックな職を得ること、または、たとえ企業でも大学でも主体的に研究ができる環境を得られる可能性を感じられることが重要だと思います。それを達成できるロールモデルがあることも必要です。生き生きと研究している博士取得者が、企業でも大学でもみかけることができたら博士課程で自分を試してみたいと思うかもしれませんが、そのような研究者が、現在、あまり多くいないということかもしれません。</p>
<p>趣旨とは違うと思いますが、説明します。医学系では専門職大学院の成立で放射線技師などの医療系技官の教員が学位取得を目的として修士に進学を希望するケースが増えています。</p>
<p>経済的な困難さゆえに進学できない。自分のプロモーションを半ばあきらめている、夢を持ってない。苦勞して優れた研究者になるよりも楽をしてそこそこの給料で人生をエンジョイしたい風潮。</p>
<p>学生の売り手市場の現在は、手堅く就職する学生が増えていると思う。地方大学では、交付金が減らされ教員採用枠が凍結（縮小）した現状では、アカデミアに残って研究しようとする学生は、少なくなっている。</p>
<p>・博士号は優秀でかつ我慢強い学生がとるものであり、自身はその器ではないと判断する（諦める）学生が多いため。これは、将来のキャリアパスの不安定さに対して、学生が非常に敏感に反応している結果でもある。</p>
<p>マスターについては、女子学生の割合増加に比例して学部卒就職の希望が増えており、また他大学大学院への転出も増加している。博士課程については、教員の定員削減を反映して将来的に国内のアカデミア職につける可能性が低いことが進学意欲を引き下げている。一方、社会人ドクターについては増加の傾向もみられる。</p>
<p>学位の取得がその後の人生設計に有利になると認識されていない。アカデミアへの門戸が狭くなっていることが大きな理由と考えられる。</p>

修士課程は、以前は、希望者が多く定員より多めに入学させていたが、最近の入試の競争は以前ほど厳しくなく、定員を何とか埋めている状況である。経済的に修士課程への進学が見合わないと思われるように感じる。国立大学といえども授業料が高く、多くの学生が奨学金を借り、かつアルバイトをしなければ進学出来ない状況になっているため、このような結果になることは致し方ないと思われる。

博士課程は、従来から進学者は少ない。アカデミアへの魅力はほぼなくなっているように見える。博士課程修了後、民間企業に就職する学生が増えているので、アカデミアには行かないが博士課程に進学する学生がそれを埋めている状況だと思われる。

博士号取得後、アカデミックポジションを獲得することが極めて困難であるにもかかわらず、博士号取得者の受け皿としては企業に期待できない、と学生が考えているように思う。

将来の就職・展望をポジティブに感じられないため。

大学教員の激務を間近に見ており、博士課程を薦めても、「先生と同じような生活を僕にもしろというのか？」と拒否されるケースが多い。やはり教員が楽しく研究活動を行えない現状が、学生にとって魅力ある職業に感じられないことが一番だと思います。

修士進学者の減少の要因は学部卒での就職の増加であり、特に近年公務員志望者が増加傾向にある。大学内で公務員受験対策の講座が開講されるようになり、その受講者は年々増加している。チャレンジするような職よりも、安定的な職を求める学生が明らかに増加しているように思う。博士進学者に関しては、もともとあまり数が多くなく、学年により数は大きく変動しており、あまり特定の傾向は感じない。

- ・ 中学高校からのキャリア教育が浸透し、以前に比べて、学生が将来の就職についてよく考えるようになった。
- ・ メディアやネットにおいて悲惨な研究者生活が報道されることが多く、大学院とくに博士後期課程に進学すると将来が暗いイメージが形成されている。
- ・ 近年の就職環境がよく、優れた学生ほど進学よりも就職を選択するケースが多い。

現在は、修士修了の学生が売り手市場であるため、学生が希望した職種につきやすいため。

過去20年あまりのアカデミアでの就職状況を若い学生が見ているので、努力とそれによって得られる結果のギャップが大きいことを知っていることが理由である。博士過程修了直後は就職・結婚などのライフイベントが考えられる年齢であるが、アカデミアでの就職状況が悪い上に、プライベートセクターでの博士取得者への待遇の悪さを考えるととてもそのリスクを取って得られるベネフィットがなさ過ぎると判断であると思う。アカデミアでは年限を限った不安定な特任ポジションしかないのも、このようなポジションは取れたとしても重要なライフイベントの妨げ以外の何物でもないと思われる。意識が高く将来の有り様を理論的に考えることができる学生ほど博士課程に行くという選択をしにくいという現状がある。

学位を取った後の人生設計が立たない。若い研究者の悲惨な境遇、研究以外の雑務に忙殺され、研究できない大学教員の姿をみて、大学教員が魅力的な仕事に見えなくなったこともあると思われる。

企業への就職を希望している学生が多い。その理由として、大学での研究者の立場の不安定性、助教や准教授が生き生きと研究していないことも要因にある。また、博士号取得者がどのように生きているのかが見えにくい状況もあるのでは。

色々な理由から科学への興味が減衰していることと博士後の就職にあまり魅力がないこと。社会のニーズが減衰してきたのでは？

「役に立つ科学」が良いという認識が強くなり、博士課程にいくよりは修士で就職して社会の役に立ちたいと思うようである。実際、「就職に役に立つ研究テーマに変更してください」と頼まれたこともある（「君の就職のために研究をしている訳ではない」と断りましたが）。

マスター修了ならば、就職先は沢山あるが、ドクターを取得すると、ドクターにふさわしい就職先が激減する。企業の採用数も少ないうえに、大学、研究所の若手のポストが非常に少ない。国立大学に至っては、助教ポストの獲得は至難の業である。

理由1：企業が修士号取得者を沢山採用するのに、博士号取得者を採用しない。

理由2：国立大学の運営費交付金の1%削減がボディーブローのように、大学の経営に大きなダメージを与え、若手の助教ポストを十分に用意できない。

理由3：学生側は就職先が非常に少ない博士課程に進学することを躊躇する。

理由4：学生の親は、多額の学費をかけてまで、子弟を就職のない博士課程に進学させることに躊躇する。

理由5：ビジネスはグローバル展開しており、世界で勝負するとき博士号を持っていることは大きな力となる。特に製薬業界では博士号を持っていないと、海外ではリスペクトされない。そのため筑波大学の博士課程の早期終了プログラムには製薬業界の修士取得者が多数入学する。だんだんと企業側も博士号の力を理解してきたようであるが、まだ不十分である。

理由6：大学側も企業の現場で実力を発揮する現場力のある人材を博士課程で育成していない。いわゆる専門バカを育成して、企業のニーズと大きくかけ離れた人材を育成している。大学の研究力を上げると同時に、企業の現場で活躍する人材を育成できるよう、大学と企業のコミュニケーションが不可欠である。

安定な職に就けないなど、卒業後の進路への不安が研究職への希望（夢）の無さにつながっているように強く感じられる。

<p>本学の場合、マスターに進学しない学生には2パターンあり、他大学（おもに都市部の旧帝大）のマスターに進学か、学部卒業と同時に就職するかで、どちらも増加傾向にある。就職が増えているのは、昨今、社会一般に就職状況が良好なためと思われる。一方、他大学への進学についてはいろいろな要素が考えられると思うが、本学薬学部の場合、元々教員が非常に少ないところに加え、最近、教員削減が進んでいること（とくに助教の減少が著しい）から、研究テーマの多様性や研究力（学生から見ると研究室の活気？）が減少していることを学生が感じ取っているのではないかとと思われる。博士課程への進学についても同じ原因が考えられるのに加え、最後の13で述べるような不安感が原因と思われる。</p>
<p>就職が売り手市場である。早く収入を得、生活を安定させたい。研究に魅力を感じていない。</p>
<p>学生に聞きました。将来への不安、学費、親の意見</p>
<p>将来への不安が大きい。安定志向で、リスクは取らない学生が増えた。</p>
<p>企業の求人が多く、就職が良いため。 学費の負担が大きい（経済的な理由）。 学生自身の学力や進学意識が低下している。</p>
<p>マスターの減少の理由の一つとして、薬学部が4年制から6年制になったこと。男子学生は就職のため、博士進学が減少した。博士課程に進学するのは女子学生が多くなった。</p>
<p>研究職のポストが少なく、身分も不安定なため</p>
<p>就職についての不安。博士、ポスドクに行ってしまうと、就職先がなくなるということが盛んに言われているため。</p>
<p>自分の研究室周辺での進学者数は変わっていませんが、将来に研究者を志向する学生の進学は減っているかもしれません。理由は卒業後の進路への不安が大きいと思います。</p>
<p>学部生の進路人気は社会の話題に左右される。10年ほど前は東大理系でトップクラスの人気を誇ったのは薬学部だったが、今はIT、AI関係がトップ。化学と生物に関係する学部はどこも人気がありません。文系でも官僚人気下がりが、いまや経済学部の人気が高い。文系理系にかかわらず、純粋学問に進む学生が減少している風潮であり、生命科学に進む学生においてもそのモチベーションは研究とは限らないと思います。子供の教育に親が大きく関わるようになり、それが大学進学のみならず就職にも影響力を持つことが一般的になってきました。親からするといつ職が得られるかもわからない研究職を目指す博士進学を子供に勧めることはなく、むしろ博士に行く＝就職が大変、ということで避けたい進路なのだと思います。子供にしてみると親に喜んでもらう選択として博士進学があることは珍しく、博士進学に進路を決めたという、凄いとより、就職がうまくいかず、博士進学しなかったんだ、という、負の選択の結果と世間に捉えられる、ということに気にもするようになります。何があっても研究者という学生は一定数いますが、それは修士の数パーセントなのではないかと思えます。研究を仕事としてやりたいけれど、それよりも早く修士で就職を決めたいという院生が半分以上でしょう。研究を将来の仕事にしようと思ったら大学や企業に勤める以外にやりようがないので、生命科学分野のパーマネントな研究職が拡大しないことには状況はかわらないでしょう。</p>
<p>経済的理由で博士に行くメリットを感じない。</p>
<p>学部卒の就職率がいいから。あるいは景気が悪くない今のうちに就職してしまおうという風潮かもしれません。</p>
<p>明らかに将来への不安、就職口の少なさが要因になっている</p>
<p>マスターへ進学する学生数減少の理由は、就職状況がよく、学部卒でも希望する企業に就職できることである。 博士課程へ進学する学生数減少の理由は、上記の就職状況に加えて、アカデミックや企業での研究者を目指す学生が大幅に減少したことである。アカデミック志望者が減少している理由は、ポジションの絶対数の圧倒的な不足にある。</p>
<p>アカデミアの魅力（職業としてだけでなく、生活や人生設計などの面も）が最近多様化した社会と増えてきた近未来的な職種から見劣りすること、現実以上にポジションをとれないとの情報が蔓延しすぎていること。</p>
<p>博士課程への進学を決める前に、就職活動が始まり、就職が決まってしまう。</p>
<p>博士課程の場合、学士・修士の就職状況が悪くないこと、および将来のキャリアパスに対する不安が多いためだと思います。</p>
<p>就職への不安。</p>
<p>修士課程に関しては、2で回答したように全入状態であり、その後卒業研究などを通して研究に適さないと考える学生が入学を辞退して、留年等をして企業インターンシップに行き、研究外で就職するケースが増えている。また、進学しても、元々研究に興味が無いためドロップアウトして中退するケースも多い。博士課程は就職が良いにもかかわらず、研究に興味を持っている人材が減少しているように思える。また、身近な助教などの教員が任期が付いていて、さらにとても忙しく、魅力的な職場とは思えないと感じている学生も多く、博士からアカデミアは特に激減している。博士課程に進学し学振の特別研究員に採択されるような院生も企業就職希望者は多い。</p>
<p>・社会の先行きの不安感と学生の安定志向に加えて、親の反対・ポスドク問題等、博士課程後の就職困難さなどの報道による、学生の不安の増大・いわゆる高偏差値校といわれる高校、大学の学生の学問そのものへの興味の低下</p>
<p>2で記したように、意欲の低い学生の増加（周りに流される）。</p>

学位取得後の研究職の減少が大きな要因かと思いますが、私たちの分野で真に面白い研究が大きく進展していないことも危惧します。これは研究職を獲得することの困難が影響し、あるいはすでに研究職に就いている方は研究費獲得を心配し、本質的な研究が萎縮しているのではないかと思います。それぞれの分野ごとに研究の進展には波があるかと思いますが、面白い基礎研究の一層の進展を期待します。

好景気の影響に加え、博士学位を取ることのメリットについての理解不足による。

デメリットのみが強調されて学生に伝わってしまっている。

研究室に所属当初は大学院進学志望の学生も、友達からの就活情報で気持ちがゆらぎ、院進学をあきらめるケースがある。

修士課程は将来設計がしやすいので希望者はやや増加の傾向だが、博士課程を修了してもポスドク等の期限付きポストしかないので進路として魅力的ではないためと思われる。

1) 博士をとっても就職先は少なく、またポジションに任期付きで不安定である。2) 博士があっても、企業への就職に必ずしもアドバンテージにならないため。